

1

哺 乳 類

ツキノワグマ

Ursus thibetanus

食肉目（ネコ目）クマ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環 庁カテゴリ

地域個体群

選 定 理 由

西日本では地域個体群として絶滅の恐れがあり、とくに九州では絶滅したと考えられている。四国ではかつては西部の高知県幡多地方にも生息するとされていたが、近年は剣山を中心とする四国東部（徳島県と高知県）の剣山山系に数 10 頭程度と推定されており危機的な状況である。徳島県内での分布の概要はわかっていない。

形 態

全身黒色で胸に白い三日月模様があるが、月の輪模様のない個体もまれにはいる。頭胴長 120-145cm、体重 70-120kg。

近似種との区別

北海道に生息するヒグマ（*Ursus arctos*）に比べ、黒褐色で黒みが強く、胸に三日月状の白斑がある。また、ヒグマに比べて小型で、体重・体長ともおよそ半分程度である。本州から瀬戸内海により長期間隔離され、頭骨が約 1 割程度小さいとか DNA での相違がいわれている。現在は四国個体群は危機的な状況であるので早急なデータの蓄積が必要である。

分布の概要

本州、四国、九州に生息する。

県内の生息状況

ブナを中心とする落葉広葉樹林帯に生息する。徳島県での確実な頭数は 12 頭といわれている。徳島県と高知県をあわせて多くても数 10 頭程度といわれており、地域個体群としての絶滅が危惧される。

生態的特性

食性はおもにブナの若芽や草本類、ミズナラ、コナラ、サワグルミなどの堅果類等の植物を採食し、夏にはアリやハチなどの昆虫類を食する。

生存に対する 脅威・保護対策

現在の推定生息頭数はまだ不確ではある。生息するといわれる地域は徳島県有数の林業地帯で人工林率が 80% をこえる町村であることから、生息地の確保が必要である。また、イノシシ猟のためのククリワナなどによって誤って捕獲されるおそれもある。捕獲禁止措置を徳島県では 1987 年から実施している。高知県では 1986 年から、環境庁は 1994 年から実施している。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 . 1994. 日本の哺乳類 . 東海大学出版会、東京 .

環境庁、編 . 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—（脊椎動物篇）. 財団法人日本野生生物センター、東京 .

徳島県 . 1996. 徳島県特定鳥獣（ツキノワグマ）生息調査—平成 5-7 年度調査報告書—. 財団法人自然環境研究センター、東京 .

カワウソ

Lutra lutra

食肉（ネコ）目イタチ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

徳島県では 1977 年 12 月 23 日に小松島市明石町の立江川堤防で、車にはねられたカワウソの死体が発見された。1978 年にカワウソの生息調査がおこなわれ、カワウソの足跡、糞、食べ残したウグイが発見されたが、ねぐらや姿は確認できなかった。その後 20 年経過するが信頼すべき生息調査はなく、絶滅に関する正確な情報がないので絶滅危惧種としてあつかった。

形 態

交通事故死したカワウソの測定値は、体長 125.0cm、頭長 14.0cm、頭胴長 73.0cm、尾長 52.0cm、頸囲 35.0cm、胸囲 44.0cm、尾根囲 15.5cm、尾根幅 6.0cm、前肢長 24.0cm、後肢長 26.0cm、体重 11.0kg。栄養状態良好で毛皮光沢があった。

近似種との区別

中国大陸中・南部、台湾、朝鮮半島などに分布する亜種シナカワウソ (*Lutra lutra chinensis*) の頭骨（基底全長 99-109mm）は日本産のものより明らかに小さく、頭骨全体が扁平で眼窩が高く位置し、後眼窩突起の発達が悪く突起間幅が狭い。サハリン産のカワウソは、シナカワウソに比べて頭骨の一般形態は類似しやや大きい、日本産のカワウソとは顕著に異なっているという。日本産のカワウソを大陸産とは異なった日本固有種の別種 *Lutra nippon* とする見解もあり、結論はえられていない。

分布の概要

かつては北海道から九州まで、対馬などの離島を含め河川の下流部に生息していた。しかし現在、生息が確認されているのは高知県南西部に限られている。

県内の生息状況

カワウソに関する古い記録は、『阿淡産誌』や麻植郡美郷村明石博雄家所蔵の文化 10 年（1813 年）の古文書に、ニホンカワウソの毛皮に対する課税記録がある。

生態的特性

河川の中下流部から沿岸部に生息し、水中で魚類・甲殻類を、陸上で野ネズミ類、鳥類などを捕食している。夜行性で川岸に巣穴をほり日中を過ごす。

生存に対する 脅威・保護対策

川の護岸工事などのため、泊まり場に適した場所の減少と食料の減少および人間による乱獲が生存上の脅威であると考えられる。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明. 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会、東京.
阿部近一・石井愼義・友成孟 宏・木内和美. 1989. 徳島県における哺乳類および爬虫類の生息状況. 徳島県立博物館開設準備調査報告、(4): 1-53.
阿部近一・石井孝・加茂重良・神野 朗・木内和美. 1978. 第 1 次カワウソ生息調査. 天然記念物緊急調査報告書（徳島県教育委員会）.
今泉吉典. 1949. 日本哺乳動物図説. 洋々書房、東京.
日本哺乳類学会、編. 1997. レットデータ 日本の哺乳類. 文一総合出版、東京.

クロホオヒゲコウモリ

Myotis pruinus

翼手（コウモリ）目ヒナコウモリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

絶滅危

Ⅰ類

選 定 理 由

ねぐらが樹洞に限られており、繁殖集団が明らかではない。今までに日本で 10 数頭しか採集記録がない。

形 態

前腕長 30-34mm、頭胴長 38-44mm、尾長 33-40mm、体重 4-7g。黒っぽい体毛で、差し毛の先端が銀色の金属光沢をもつ。

近似種との区別

分布域が重なるノレンコウモリ(*Myotis nattereri*)より一回り小さく、前腕長は 35mm 以下である。

分布の概要

日本固有種である。本州（中国地方を除く）、四国（徳島県と愛媛県）から知られる。

県内の生息状況

徳島県では 2 カ所で捕獲されているが、生息状況は十分には分らない。

生態的特性

樹洞性・夜行性・昆虫食・日本全体で観察例が少なく、十分には分らない。洞窟でもみつかると。

生存に対する 脅威・保護対策

ねぐらである樹洞の大木の減少が、種の維持に影響を与える。樹洞を持つ大木の伐採をしないようにすることが大切である。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明・1994. 日本の哺乳類・東海大学出版会、東京。
今泉吉典・1960. 原色日本哺乳類図鑑・保育社、大阪。
前田喜四雄・1984, 1985, 1986. 日本産翼手目の採集記録 (I), (II), (III)・哺乳類科学 49: 55-78, 51: 29-36, 52: 79-97。
日本哺乳類学会、編・1997. レッドデータ日本の哺乳類・文一総合出版、東京。

トガリネズミ

Sorex caecutiens

食虫（モグラ）目トガリネズミ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

徳島県内でも分布が限定され、個体数も少ない。

分布の概要

夏毛の背面は暗赤褐色、腹面は灰色または薄茶色。冬毛は全体に暗色が強くなる。頭胴長 48-78mm、尾長 39-55mm、後足長 11.5-13.7mm、体重 3-13.5g。

近似種との区別

歯の先端表面はトガリネズミでは摩耗していないものは赤褐色であるが、ジネズミでは白色である。

分布の概要

北海道、および本州・四国の高山帯に生息する。シベリア大陸、朝鮮半島、サハリン、北海道という分布が示すように北方性の種であるので、徳島県内の他の高山地帯でも少数しか生息していないものと思われる。

県内の生息状況

四国では、徳島県では剣山周辺のみ、愛媛県と高知県にまたがる石鎚山脈の山岳地のみからしか知られておらず、生息数は少ない。

生態的特性

高山の森林や低木林などの落葉層や腐食層に生息する。

生存に対する 脅威・保護対策

生息地である森林や低木林の消失をさける監視を必要とする。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明・1994. 日本の哺乳類・東海大学出版会、東京。
日本哺乳類学会、編・1997. レッドデータ 日本の哺乳類・文一総合出版、東京。

ノレンコウモリ

Myotis nattereri

翼手（コウモリ）目ヒナコウモリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

記録のある都道府県は全国的にみても 12 と少なく、個体数も多くない。

形 態

前腕長 38-42mm、頭胴長 47-55mm、尾長 39-48mm、体重 5-8g。暗い褐色系の体毛をもつ。腿間膜の後縁に細毛を列生する。耳珠は 9mm 以上である。

近似種との区別

モモジロコウモリ (*Myotis macrodactylus*) は腿間膜の後縁に細毛を列生しない。日本産のものを亜種ホンダノレンコウモリ (*Myotis nattereri bombinus*) とする研究者もある。

分布の概要

北海道、本州、四国、九州から知られる。四国では徳島県と愛媛県から知られる。不明な点が多く、今後の調査が待たれる。

県内の生息状況

徳島県では 1 箇所でのみ記録されており、ここ 10 年余り記録がなく、十分なことは分らない。モモジロコウモリと混群を形成する可能性があり、形態もよく似ているので、より詳しい調査をすれば生息状況も分かってくる。

生態的特性

洞窟性・夜行性・昆虫食・出産時期は初夏で、産児数は 1 仔である。

生存に対する 脅威・保護対策

洞窟や隧道を生息場所としているので、そのような場所の環境を変えないようにすることが必要である。繁殖集団の場所が不明なのでその場所の確認が必要である。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明, 1994. 日本の哺乳類, 東海大学出版会、東京。
今泉吉典, 1960. 原色日本哺乳類図鑑, 保育社、大阪。
前田喜四雄, 1984, 1985, 1986. 日本産翼手目の採集記録 (I), (II), (III), 哺乳類科学 49: 55-78, 51: 29-36, 52: 79-97。
日本哺乳類学会、編, 1997. レッドデータ 日本の哺乳類, 文一総合出版、東京。

ウサギコウモリ

Plecotus auritus

翼手（コウモリ）目ヒナコウモリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

樹洞がねぐらであり、分布が限られている。個体数も多くない。

形 態

ウサギのように耳介が極めて大きい。前腕長 40-45mm、頭胴長 42-58mm、尾長 42-55mm、体重 5-13g。薄茶色、灰褐色系の体毛をもつ。

近似種との区別

近似種はない。日本産を別種ニホンウサギコウモリ（*Plecotus auritus sacrimontis*）とする意見もある。

分布の概要

ヨーロッパから中国北東部、および日本では北海道、本州（中国地方を除く）、四国（徳島県と愛媛県）に生息する。日本国内では数が少ない。

県内の生息状況

徳島県では剣山周辺に限られている。

生態的特性

樹洞性、夜行性であり昆虫食。本来のねぐらは樹洞であるが、洞窟でも見つかる。秋から冬にかけて洞窟で見つかることが多い。出産時期は初夏で、産児数は 1 仔である。

生存に対する 脅威・保護対策

ねぐらである樹洞の大木の減少が、種の維持に影響を与える。樹洞を持つ大木を伐採しないようにすることが大切である。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明．1994．日本の哺乳類．東海大学出版会、東京．
今泉吉典．1960．原色日本哺乳類図鑑．保育社、大阪．
前田喜四雄．1984, 1985, 1986．日本産翼手目の採集記録（Ⅰ）,（Ⅱ）,（Ⅲ）．哺乳類科学 49: 55-78, 51: 29-36, 52: 79-97．
日本哺乳類学会、編．1997．レッドデータ 日本の哺乳類．文一総合出版、東京．

コテングコウモリ

Murina ussuriensis

翼手（コウモリ）目ヒナコウモリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

樹洞がねぐらであり、分布が限られている。

分布の概要

前腕長 29-33mm、頭胴長 41-54mm、尾長 26-33mm、体重 4-7g。黄土色から薄茶色系の体毛をもつ。腿間膜は上面全部が長い毛で覆われ、その後縁にも長い毛が生えている。鼻孔は管状で、外側やや前方に突出する。

近似種との区別

分布域が重なるテングコウモリより一回り小さい。日本産だけを別種の固有種ニホンコテングコウモリ（*Murina sylvatica*）とする研究者もある。

分布の概要

北海道、本州、四国（徳島県と愛媛県）、九州、対馬、奄岐から知られる。徳島県内での分布の概要はわかっていない。

県内の生息状況

観察例が少なく、不明である。

生態的特性

樹洞性・夜行性・昆虫食・出産時期は初夏で、産児数は 1-2 仔である。

生存に対する 脅威・保護対策

ねぐらである樹洞の大木の減少が、種の維持に影響を与える。樹洞を持つ大木を伐採しないようにすることが大切である。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明．1994．日本の哺乳類．東海大学出版会、東京．
今泉吉典．1960．原色日本哺乳類図鑑．保育社、大阪．
前田喜四雄．1984, 1985, 1986．日本産翼手目の採集記録（Ⅰ）,（Ⅱ）,（Ⅲ）．哺乳類科学 49: 55-78, 51: 29-36, 52: 79-97．
日本哺乳類学会、編．1997．レッドデータ 日本の哺乳類．文一総合出版、東京．

キツネ

Vulpes vulpes

食肉（ネコ）目イヌ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

1978年の徳島県の調査では生息するという情報はなかった。その後、種々の情報はあがるが徳島県全域ではきわめて少ないと推測される。

形 態

1997年10月29日板野郡土成町土成の阿讃山麓の広域農道で交通事故死にあったキツネの実測資料（雄）では、頭胴長66.3cm、尾長31cm、耳長7.7cm、後足長7.9cm、体重4.74kgであった。背面の毛は、赤褐色で顎の下から腹部は白色で、四肢の足先前面には黒色の毛が少しまじっていた。尾は背面の毛と同じ赤褐色で先端だけは白毛があった。

近似種との区別

銀狐系の体毛である北海道産をキタキツネ（*Vulpes vulpes shrencki*）とし、本州以南のホンドギツネ（*Vulpes vulpes japonica*）と亜種で区別される。

分布の概要

北海道、本州、四国、九州、国後島、択捉島、淡路島に分布する。ヨーロッパ大陸からシベリア大陸や中国大陸、サハリン、北海道に広く分布する種であるが、徳島県では従来から生息状況は少ない記録しかない。

県内の生息状況

徳島県での分布調査は十分なものではない。近年の捕獲または死体発見場所は、山城町（1982年1月30日）、半田町陰名（1988年4月14日）、貞光町浦山（1995年1月6日）、土成町土成（1995年10月29日）、勝浦町三溪（1984年3月8日）、佐那河内村大川原高原（1996年8月1日）である。三野町、板野町、三加茂町でも目撃されている。

生態的特性

平地より標高1800m位まで分布する。主として夜行性で昼は終日寝ている。一頭で暮らす。3-4月に平均4仔を巣穴の中で出産し、夏まで家族の群で行動する。食物は主にネズミ、小鳥などであるが、畑のトウモロコシやニワトリ・家畜の死体も採食する。

生存に対する 脅威・保護対策

徳島県内にはもともと少ないが、特に野犬による脅威が大きい。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明・1994. 日本の哺乳類・東海大学出版会、東京。
阿部近一・石井愷義・友成孟宏・木内和美・1989. 徳島県における哺乳類および爬虫類の生息状況・徳島県立博物館開設準備調査報告、(4): 1-53。
今泉吉典・1949. 日本哺乳動物図説・洋々書房、東京。
今泉吉典・1960. 原色日本哺乳類図鑑・保育社、大阪。

ヒメヒミズ

Dymecodon pilirostris

食虫（モグラ）目モグラ科

徳島県カテゴリ

地域個体群

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

徳島県内の山岳地に分布が限られ、個体数が少ない。

形 態

背面は黒色または黒褐色で腹面はやや淡色である。尾の毛は長く、先端部では 8-15mm、中央部では 5-7mm である。頭胴長 70-84mm、尾長 32-44mm、後足長 12.8-15.2mm、体重 8-14.5g、尾率は 43-60%。

近似種との区別

上顎第一切歯がやや小さく扁平で幅が広い点と、下顎の歯は 9 対でヒミズの 8 対と異なる。

分布の概要

日本固有種・固有属である。本州、九州、四国に分布する。

県内の生息状況

徳島県内では剣山周辺のみしか報告はない。愛媛県では伊予三島の佐々連山（800m）新居浜市下兜山（1000m）のような比較的低いところでも採集されているので、もっと調査がいきとどけば分布状況は変化するものと考えられる。

生態的特性

比較的標高の高い地域の草地、低木林、高木林などにすみ、おもに昆虫やミミズ類を捕食する。

生存に対する 脅威・保護対策

競合種であるヒミズの侵入しにくい岩礫地などの生息地の保全が必要である。

参 考 文 献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 . 1994. 日本の哺乳類 . 東海大学出版会、東京 .
日本哺乳類学会、編 . 1997. レッドデータ 日本の哺乳類 . 文一総合出版、東京 .